

201421010A

高リスク層のH I V感染監視と予防啓発及び 内外のH I V関連疫学動向のモニタリング に関する研究

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業

平成 26 年度

総括・分担研究報告書

2014

平成 27 年 3 月 (2015) 主任研究者 木原 正博

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業

高リスク層の HIV 感染監視と予防啓発
及び内外の HIV 関連疫学動向のモニタ
リングに関する研究

平成26年度総括・分担研究報告書

平成27年（2015年） 3月

主任研究者 木原 正博

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野

氏 名	所 属	職 名														
国内外のHIV/STI関連情報の戦略的収集と分析、 情報基盤構築に関する研究 研究代表者 <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr><td>木原 正博</td></tr> <tr><td>木原 雅子</td></tr> <tr><td>本多 由起子</td></tr> <tr><td>立石 由紀子</td></tr> </table>	木原 正博	木原 雅子	本多 由起子	立石 由紀子	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野 京都大学大学院医学研究科社会疫学分野 京都大学大学院医学研究科社会疫学分野 京都大学大学院医学研究科社会疫学分野	教授 准教授 院生 院生										
木原 正博																
木原 雅子																
本多 由起子																
立石 由紀子																
STDクリニック受診者のHIV感染と 行動モニタリングと予防啓発に関する研究 研究分担者 <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr><td>荒川 創一</td></tr> <tr><td>安田 晶子</td></tr> <tr><td>尾上 泰彦</td></tr> <tr><td>澤村 正之</td></tr> <tr><td>佐々木 寛</td></tr> <tr><td>細部 高英</td></tr> <tr><td>伊藤 雅康</td></tr> <tr><td>波多野 紘一</td></tr> <tr><td>和泉 孝治</td></tr> <tr><td>渡辺 朝香</td></tr> <tr><td>野村 真康</td></tr> <tr><td>郷司 和男</td></tr> <tr><td>下垣 博義</td></tr> <tr><td>澤田 益臣</td></tr> </table>	荒川 創一	安田 晶子	尾上 泰彦	澤村 正之	佐々木 寛	細部 高英	伊藤 雅康	波多野 紘一	和泉 孝治	渡辺 朝香	野村 真康	郷司 和男	下垣 博義	澤田 益臣	神戸大学医学部附属病院感染制御部 吉尾産婦人科医院 宮本町中央診療所 新宿さくらクリニック 佐々木医院 細部医院 岐阜泌尿器科 波多野泌尿器科皮ふ科医院 いずみレディースクリニック 渡辺医院(産婦人科) 野村クリニック ごうじ泌尿器科クリニック しもがき泌尿器科クリニック レディースクリニックさわだ	教授 院長 院長 院長 院長 院長 院長 院長 院長 院長 院長 院長
荒川 創一																
安田 晶子																
尾上 泰彦																
澤村 正之																
佐々木 寛																
細部 高英																
伊藤 雅康																
波多野 紘一																
和泉 孝治																
渡辺 朝香																
野村 真康																
郷司 和男																
下垣 博義																
澤田 益臣																
薬物乱用・依存者におけるHIV 感染と行動のモニタリングに関する研究 研究分担者 <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr><td>和田 清</td></tr> <tr><td>石橋 正彦</td></tr> <tr><td>中村 亮介</td></tr> <tr><td>前岡 邦彦</td></tr> <tr><td>森田 展彰</td></tr> </table>	和田 清	石橋 正彦	中村 亮介	前岡 邦彦	森田 展彰	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 おおりん病院 東京都立松沢病院 瀬野川病院 筑波大学社会医学系精神衛生学	部長 院長 医師 副院長 准教授									
和田 清																
石橋 正彦																
中村 亮介																
前岡 邦彦																
森田 展彰																
外国人薬物使用者等のHIV感染と行動の モニタリングに関する研究 研究分担者 <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr><td>中村 亮介</td></tr> </table>	中村 亮介	東京都立松沢病院	医長													
中村 亮介																
海外のHIV/性感染症の流行等(橋本(西村)由美子 動向に関する研究	関西看護医療大学看護学部	講師														

目 次

I. 総括研究報告

高リスク層の HIV 感染監視と予防啓発及び内外の HIV 関連疫学動向のモニタリングに関する研究 ……………木原正博・他 1

<個別研究>

海外及び国内の HIV/性感染症の流行とリスク情報の収集分析に関する研究

(1) 先進諸国の HIV/AIDS 及び性感染症の動向に関する研究 ……………西村由実子・他 …………… 13

(2) 東アジア諸国における HIV/STD 流行と出入国の動向に関する研究 ……………西村由実子・他 ……………70

(3) 我国の STI 流行及び妊娠中絶率等の動向に関する研究 ……………木原正博・他 ……………89

II. 分担研究報告

1. 性感染症患者の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究 ……………荒川創一、木原正博・他 ……………143

2. 薬物乱用・依存者の HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究 ……………和田 清・他 ……………152

3. 外国人薬物使用者等の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究 ……………中村亮介 ……………174

III. 研究成果の刊行に関する一覧表 ……………178

平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
高リスク層の HIV 感染監視と予防啓発及び内外の HIV 関連疫学動向の
モニタリングに関する研究

総括研究報告書

主任研究者：木原正博（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野）

研究要旨

わが国における効果的かつ効率的な HIV 予防施策の推進に資することを目的として、①わが国の HIV 流行に関連する内外の二次情報のデータベースの構築と分析に関する研究、②リスクグループ（STD 患者、薬物使用者）の HIV/STD 感染と行動のモニタリングに関する研究を実施した。

1. 海外及び国内の HIV/STD の流行とリスク情報の収集分析に関する研究（木原正博、西村由実子）

本年度は、以下について情報収集を行った。

1-1) **海外関係**：①近隣諸国・地域（中国、台湾、韓国、香港）の HIV/AIDS 及び STD(STD) に関するサーベイランス情報（韓国～2013 年、中国～2011 年[一部 2013 年まで]、台湾・香港～2013 年）、②主要先進諸国（米、英、独、仏、加、豪）の HIV/AIDS 及び STD に関するサーベイランス情報（～2012/13 年）。

1-2) **国内関係**：①日本の STD に関するサーベイランス情報（～2013 年）、②その他の行政統計（母子保健統計、薬事工業生産動態統計、出入国管理統計（～2013 年）。

以上の情報に基づいて以下の分析を実施した。

1-1) **海外関係**：①近隣諸国・地域における HIV/AIDS 報告数と感染経路別の年次推移、②主要先進国における HIV/AIDS 報告数と感染経路の年次推移、③先進国及び近隣諸国・地域における STD（クラミジア、淋病、梅毒）報告数の年次動向。

1-2) **国内関係**：①STD（クラミジア、淋病、性器ヘルペス、尖圭コンジローム、梅毒）報告数と年齢分布の年次推移、②人工妊娠中絶率の年次推移、国籍別入国者数・海外在住邦人の年次推移、③コンドーム国内販売数の年次推移。

以上の分析から以下の結果を得た。

- a. 東アジア地域において、近年、HIV/AIDS 報告数が増加しており、中国、台湾、香港では一時鈍化傾向が生じたが、再び増加傾向にある。当初薬物静注の割合が大きい国もあったが、現在では全ての国・地域で主たる感染経路は性感染、特に同性間感染に移行した。
- b. 主要先進諸国では、AIDS 患者報告数が、1990 年代半ば以降（ART 導入以降）一貫して減少を続ける一方、HIV 感染者数は、2000 年代に入って、ほとんどの国で増加に転じたが、2004・5 年からは、国によって、減少、増加、横ばいと様々な状況にある。HIV 報告の中では、薬物静注は低値で横ばいを続けているが、同性間感染がどの国でも 2000 年以降再び増加し始め、過去最高水準レベルの症例数が報告されている。異性間感染は、米、英、仏、加で減少傾向にあるが、豪では増加、独では横ばいである。性感染症報告は全体的に増加傾向だが、2013 年米国と豪州で性器クラミジアの前年比減が記録され、淋菌感染症と梅毒は各国において顕著な増加が認められた。また、先進国では、HAART の普及による HIV 感染者の蓄積が進行し、HIV 感染の社会的負荷が増大を続けている。
- c. 我が国では、特に近隣諸国との間で、HIV 流行が流入・流出しやすい出入国動向が継続している。

- d. 我が国では、梅毒以外の STD は、2000 年代初めから減少を続けてきたが、2009-10 年に全疾患で下げ止まり、性器ヘルペスは、男女ともに増加に転じた。これらのことから、2002 年ごろから始まった我国の STD の減少はほぼ止まり、新たなフェーズに入りつつあることが示唆された。
- e. 梅毒は、梅毒以外の STD とほぼ正反対の動向を示し、2002 年頃に底を打った後に増加に転じ、2013 年には特に大きく増加した。我々が実施した文献の系統的レビューから、男性における梅毒流行は主として同性間感染を反映するものと考えられる。
- f. 10 歳代及び 20 歳代前半における人工妊娠中絶率は、近年減少を続けていたが、ここ数年で減少は鈍化した。上記梅毒以外の STD の動向を勘案すれば、若い世代で、リスクの高い性行動の「新しい波」が生じつつある可能性が示唆される。

以上、HIV や STD 流行の国際的動向とその背景に関するデータの収集と分析が進み、また、国内の HIV/STD 流行や関連情報の分析から、わが国の HIV 流行に関する文脈的理解が深まった。これらの情報の一部は Web サイト (<http://www.aidssti.com>) に公開した。

2. STD 患者の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究 (荒川創一)

STD クリニック受診者について、全国 13 の対象施設中 11 施設を受診した合計 280 例の受診者 (男性 180 例、女性 70 例、風俗営業女性 30 例) について、無料の HIV 検査の提供と HIV 検査ニーズや HIV 関連知識に関するアンケート調査を実施した。その結果、男性受診者中 6 名 (3.33%) に HIV 陽性者を認めた。アンケート分析の結果、HIV 検査目的以外で受診した例は、男女で 70-80%、CSW で 50% であったが、その中の無料検査希望者は、90% 以上と極めて高率で、STD クリニック受診者の中では、無料検査希望が強いことが示唆された。HIV 感染リスク認知が「全くない or 低いと思う」と回答した者は、男性で 65% 以上、女性で 55% 以上、CSW で 30% と、リスク認知が不十分な状況が示唆された。HIV 関連知識 (7 項目) に関しては、正解率 65% 以上が多く、知識レベルは一般に低くはないが、一部に認知が不十分な知識が存在した。

3. 薬物乱用・依存者の HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究 (和田 清)

薬物乱用者・依存者について、94 年以來の調査を行い、入院薬物中毒患者の推定 11% をカバーする全国 5 医療施設の新規対象者 (n=277) と、6 自助グループの新規対象者 85 人を分析対象とし、HIV、梅毒、B/C 肝炎感染率、注射行動、性行動を調査した。HIV 感染者は、病院群で 3 名、自助グループ群では 1 名認められたが、いずれも MSM で「脱法ドラッグ」依存者であった。最近の傾向として、「捕まる行為から捕まらない行為」への流れが顕著であり、「脱法ドラッグ」関連患者が激増し、その結果、分類上は「他剤・多剤」関連患者 (F19) が激増し、これまで数の上では常に最多だった F15 (覚せい剤) 関連患者数を大きく上回るようになった。同時に、2 群で、HIV 抗体陽性者がこの数年来増えているのは、ゲイ・コミュニティーないしは HIV 感染治療施設と薬物関連治療施設間での連携が増加した結果であると考えられた。

4. 外国人薬物使用者等の HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究 (中村亮介)

首都圏某公立精神科病院に薬物使用等で入院となった 32 カ国の外国人患者 74 人 (男 41、女 33) を対象として、対象者の同意の下に調査用紙によるリスク行動の聞き取り調査と採血による血清学的検査、ないしは診療録からの転記調査を実施した。本年度も HIV 陽性者を認めなかったが、脱法ハーブの使用者や奔放な性行動をとる一群の増加が認められた。

1. 研究の分担

- | | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| ●国内外の HIV/STD 流行及び関連情報の集約的分析に関する研究 | 健康医学系専攻社会疫学分野 教授) |
| 木原正博 (京都大学大学院医学研究科社会 | 橋本 (西村) 由実子 (関西看護医療大学看護学部、講師) |

- STD患者のHIV感染と行動等のモニタリングに関する研究

荒川創一（神戸大学医学部附属病院感染制御部 教授）

- 薬物乱用・依存者のHIV感染率と行動等のモニタリングに関する研究

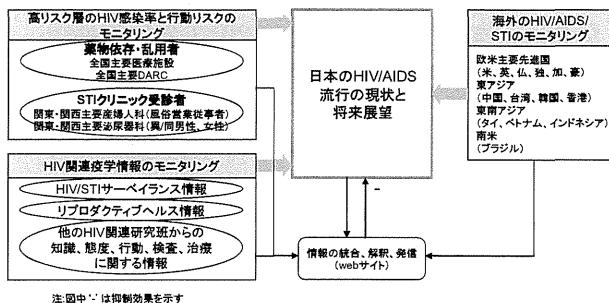
和田 清（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部 部長）

- 外国人薬物使用者等のHIV感染と行動等のモニタリングに関する研究

中村亮介（東京都立松沢病院精神科医長）

2. 研究目的

我国の高リスク層（薬物依存・乱用者、セックスワーカー[CSW]、男女STD患者）のHIV感染及びリスク行動をUNGASS（国連エイズ特別総会）指標を含めて監視すると共に、我国のHIV流行に影響する①国内のSTD/母子保健関連の動向、②諸外国のHIV/STI流行の動向に関する情報を収集・分析し、我国のHIV流行の現状と将来展望の理解に必要な情報基盤を構築する（図）。



3. 研究の戦略的意義

東アジアにおけるHIV流行の本格化により、わが国におけるHIV流行の一層の加速・拡大が懸念されることから、適時で効果的かつ効率的なHIV予防施策の実施は国家的に緊要の課題となっている。そのためには、状況分析に必要なデータを収集・分析して、総合的に評価し、それに基づいて、施策を立案・実施することや情報をわかりやすく社会に発信して、世論形成を図ることが不可欠である。しかし、わが国のエイズ対策は長年こうしたプロセスが不十分なまま対策が行われてきた。本研究は、そのギャップを補い、将来にわたる状況分析、施策評価のための情報基盤を整えるという、国家レベルでの戦略的意義がある。

4. 研究方法及び結果

(1) 海外及び国内のHIV/STDの流行とリスク情報の収集分析に関する研究（木原正博）

わが国の流行の展望や対策の必要性を的確に判断するには、関連情報を可能な限り収集し、総合的に分析・解釈することが必要であるが、わが国にはそうした情報を系統的に収集分析する仕組みが存在していない。本研究では、これらの内外の情報を戦略的に収集・分析し、データベースを構築することを目的とする。

1-1) 先進諸国のHIV/AIDS及びSTDの動向に関する研究（木原正博、西村由実子、木原雅子）

(1) 目的

主要先進国のHIV流行の動向を明らかにし、わが国の流行のおかれた国際的文脈を明らかにする。また、同じ性行動が背景となる性感染症（STD）の流行状況を国際比較し、わが国のHIV感染リスクとその動向の特徴の分析に資する。

(2) 方法

各国の関連機関のwebサイトや各国関連部局との直接交渉により、HIV/AIDS及びSTD報告数や推計値に関するデータを収集してデータベースを構築し、HIV/AIDSの感染経路別年次推移やSTDの動向などを分析した。

(3) 結果・考察

●HIV/AIDSの状況

1) 米国

平成26(2014)年11月に2012年末までのHIV Surveillance ReportがCDCより発表され、2008年に導入された全州における匿名氏名ベースHIV報告システムによるデータがよ

うやく 5 年分出揃った。

2008～2012 年の年間推計 HIV 発生率はほぼ横ばいであった。年齢別では、13～14 歳と 20 代で増加し、35 歳以上は減少した。2012 年に発生率が最も高かったのは 20～24 歳 (36.3/10 万対) および 25～29 歳 (35.5/10 万対) だった。性別では、5 年間の発生率の変化は、女性では減少し男性では横ばいだった。2012 年の HIV 感染の約 80%は男性であった。感染経路別では、同性間感染が増加したことが挙げられる。2012 年では、成人および若者男女の感染の 67%が同性間感染であり、26%が異性間感染と、全体の 93%を性感染が占めた。

2008～12 年の 5 年間の Stage3(AIDS)の年間推計発生率は減少し、2012 年は 8.9 (10 万対) だった。年齢層別では、20～24 歳で増加し、それ以外の層では減少か横ばいだった。2012 年では、45～49 歳の 19.0 (10 万対) が最も高く、次いで 40～44 歳の 18.5 (10 万対) だった。性別では、5 年間で男女共に Stage3 (AIDS) の推計発生率は減少した。2012 年の Stage3(AIDS)診断の 75%を男性が占めた。感染経路別の 5 年間の変化は、男性同性間感染のみ横ばいで、それ以外の静注薬物使用や異性間感染は男女とも発生率が減少した。

2) カナダ

カナダでは、HIV and AIDS in Canada という包括的な報告書が毎年出されていたが、2009 年以降しばらく出ていなかった。しかし、2014 年 11 月に 2013 年 12 月末までのデータをまとめた報告書が発行された。

それによると、HIV 報告数は 2008 年以来緩やかな減少傾向を続け、2013 年は 2,090 人と過去最低となった。性別では、女性の割合は 21.9%であり、この割合は過去約 10 年、比較的安定している。また、女性では 10 代と 20 代の割合が多いのに対し、男性では 30 代以上の割合が多くなっている。感染経路については、2013 年の 15 歳以上の HIV 報告全体の 49.3%を同性間感染が占めている。それに次ぐのが異性間感染の 29.6%、三番目は IDU であり 12.8% だった。

AIDS については、2013 年中に 177 人報告され、成人 AIDS 報告数のうち 76.8%が男性である。年齢区分では、HIV 同様、女性は 10～20 代の割合が多く、男性は 30 代、40 代、50 代

以上が多くなっている。2013 年の AIDS 報告のうち大部分が (59.1%) が、感染経路に関する情報が不明だった。

全体として、2013 年の HIV 報告数人口 10 万人当たり 5.9 は、1985 年の報告開始以降最も低い。この傾向が今後も続くか監視が必要である。感染経路としては同性間感染が最も多く、ついで異性間感染、IDU である。年齢と性別については、女性は若い年齢の感染が多いが、男性は高齢での感染割合が高いという傾向がある。

3) オーストラリア

2013 年末における HIV 感染者の推計は 26,800 人である。2013 年の HIV 新規感染報告は 1,236 人で、前年 (1,253) から少し減った。人口 10 万対の HIV 発生率は、2004～08 年の 4.7 から 2009～13 年の 5.1 に増加している。国全体としての感染経路は、同性間感染が最も多く 2013 年は 71%を占めた。しかしアボリジニーやトレス海峡島民では、IDU の割合が高い。また、2009 年から 2013 年に異性間感染と報告された 1,417 件のうち、56%は高発生率の国から来た人もしくはそのパートナーであった。さらに、2013 年の HIV 感染報告のうち、ごく最近の感染は 350 件であり、これは 2004 年の 261 件より増加している。

2011 年版報告書 (2010 年分) より、AIDS Registry に関するデータおよび記述がなくなったため、AIDS 報告数について 2009 年まで同様にモニターすることが難しくなった。

4) 英国

2013 年末現在で、英国の HIV 感染者数は、107,800 人と見積もられている。これは 15～59 歳の 1,000 人中 2.8 人 (女性 1.9 人、男性 3.7 人) が感染しているという割合である。そのうち約 24%は、自分が感染していることを知らない。2013 年に新規で HIV 感染と診断された人は 6,000 人、AIDS と診断された人は 320 人だった。AIDS が進行した状態 (診断後 3 か月以内に CD4 が <350cells/mm³) で診断される人の割合は、2004 年の 57%から 2013 年は 42%と減少した。

同性間感染が最も多い感染経路であり、2013 年の推定では 43,500 人が同性間性行為で感染し、そのうち 7,200 人 (16%) は自分の感染を知らないとされている。ここ 10 年、

年間約 2,600 人の同性間感染が報告されてきたが、2013 年は報告数が 2,800 人にのぼった。

次に影響を受けているグループは、アフリカ系の男女であり、2013 年には約 38,700 人が HIV に感染していると見積もられている。これは英国における異性間感染者の 65%を占める。

HIV ケアに関しては、2013 年に抗ウイルス療法 (ART) を受けた人は、それが必要な 81,500 人中 73,300 人 (90%) にのぼっている。2004 年 (41,160 人中 28,240 人、69%) と比べて、割合も実数も増加している。

5) フランス

2013 年、フランスでは、3,484 人の新規 HIV と 404 人の AIDS が報告されている。これは暫定値であり、報告漏れのケースが加わるので、確定値はこれより必ず多くなる。推計では約 6,400 人が同年に新規感染したと見積もられている。感染経路別では、同性間感染と外国出身者 (4 分の 3 がサハラ以南アフリカ) の異性間感染が多く、それぞれ 2013 年の報告数の約 42% と 38% を占めると見積もられている。これにフランス人の異性間感染 (17%) と薬物使用 (約 1%) が続く。この暫定値においては、感染経路不明が 4 割弱となっているので、これらのケースの感染経路が判明するとより正確な流行状況が明らかになるだろう。

6) ドイツ

ドイツの HIV 感染および AIDS 患者報告数は、Federal Health Monitoring のウェブサイト上の HIV/AIDS データベースから入手可能である。今年度は 2013 年分までの更新がなされておらず、2013 年データを追加することができなかった。2012 年分を再掲する。

2012 年にドイツ国内で報告された HIV 感染者数は、2,974 人 (男性 2,520 人、女性 452 人) で、前年の 2,700 人から増加した。AIDS 症例は、280 件報告されている。これらは暫定値であり、修正が加わるが、HIV 感染における増加は憂慮すべきことである。感染経路としては同性間感染の増加が顕著である。

以上、先進国の全般的な状況としては、多剤併用療法 (HAART 療法) が導入された 1990 年半ばから後半にかけて以降、AIDS 患者新規報告数は、日本を除き、大きく減少し、現在も

減少傾向が続いている。HIV 感染者新規報告数は、2005-6 年までに急増は止まり、一部 (独、豪) を除き、減少に転じている。

以上の分析から、21 世紀に入って、欧米では流行が同性間感染が増加しており、また HAART 療法の普及により、AIDS 患者の発症数は減少しているものの、感染者の社会的蓄積が進むという状況が進行している。

●STD の状況

性器クラミジアは、各国において最も感染報告が多い性感染症であり、女性や若者層での感染率が高いことが特徴である。2013 年は、米国およびオーストラリアにおいて初めて報告数が前年比で減少したことが注目すべき点である。カナダおよび英国ではそれまで同様、大幅な増加を記録した。英国で実施されている 15~24 歳の若者に対するクラミジアサーベイランスのようなよりアクティブな流行状況把握と予防のための努力が各国で必要である。

淋菌感染症は、2013 年、米国、カナダ (2011 年)、オーストラリア、英国の 4 か国において、顕著な増加が認められた。抗生剤に対する耐性をもつ淋菌の報告や、MSM における感染の増加が特に喫緊の課題となっている。

梅毒は症例の定義が各国で異なるため、直接比較することは難しいが、男性、高い年齢層での報告が多いことが特徴の性感染症である。梅毒についても、2013 年 4 か国 (カナダは 2011 年データ) での増加が認められた。

性感染症報告の近年の増加は、検査の拡大やより感度の高い検査方法の導入、性行動の変化などの要因が複合した結果であると考えられるが、疾患および国を問わず、MSM における STD の増加は最重要の課題となっている。

1-2) 東アジア諸国における HIV/STD 流行と出入国の動向に関する研究 (木原正博、西村由実子、木原雅子)

(1) 目的

わが国の HIV 流行に特に関わりが深いと考えられる東アジア地域における HIV 流行の動向を明らかにし、わが国の流行のおかれた国際的文脈を明らかにする。また、同じ性行動が背景となる STD (STD) の流行状況を国際比較し、わが国の HIV 感染リスクとその動向の特

徴の分析に資する。

(2) 研究方法

関連機関の web サイトや関連部局への直接の問い合わせにより、HIV/AIDS 及び STD 報告数や推計値に関するデータを収集してデータベースを構築し、HIV/AIDS の感染経路別年次推移や STD の動向などを分析した。

出入国については、以下の情報源からデータを入手した。

＜出入国者数に関する情報＞

- ・法務省入国管理局ホームページ
- ・日本政府観光局 JNTO ホームページ
- ・国土交通省『観光白書』
- ・外務省海外在留邦人統計

(3) 結果・考察

A. 各国の HIV/AIDS 及び STD の状況

1) 中国

2014 年 6 月に保健省が出した報告書によると、2013 年末までに報告されている累計の HIV 感染者および AIDS 患者数は 43.7 万人で、うち AIDS 患者数は 17.4 万人、死亡報告は 13.6 万人となっている。2012 年の累計 386,000 人を差し引くと、2013 年には約 5.1 万人の新規報告があったこととなり、これは前年の報告数より多い。推計値では、2013 年末現在に中国総人口に占める HIV 感染者の割合は 0.033% となっており、全体としては低流行レベルにとどまっている。ただし、地域やグループによる感染率や流行状況の違いは非常に大きい。地域的には、国内の HIV/AIDS 報告の 79% を 9 つの省・地域（雲南省、広西チワン自治区、四川省、河南省、新疆ウイグル自治区、広東省、重慶市、湖南省、貴州省）が占めている。

グループ別の定点観測データによれば、MSM における感染率が上昇しており 2013 年では 7.3% を記録している。次いで、減少傾向ではあるものの静注薬物使用者における感染率が 3.6% と高い。経路別では、性感染の割合が 2006 年の 33.1% から 2013 年は 90.8% へと急増した。特に、同性間感染の割合は 2006 年の 2.5% から 2013 年の 21.4% へと増加が著しい。流行の様相が 2005 年以前の薬物使用による感染から性感染へと、最近 10 年において大きく変化した。

2) 台湾

新規 HIV 報告数は 2009 年を境に減少から

増加に転じており、2013 年の台湾人における新規 HIV 報告数は 2,244 人、AIDS 患者報告数は 1,431 人で、増加の一途をたどっている。

感染経路別では、HIV/AIDS 報告ともに同性間感染の増加が顕著である。AIDS 患者報告数の増加は、2005～6 年の薬物使用による HIV 感染のアウトブレイク時に HIV 感染として報告されなかったケースが AIDS 発症として最近報告されていることが考えられる

年齢別では、HIV 感染・AIDS 報告共に 20 代の割合が増加しているのが 2013 年の特徴である。

STD では、梅毒は 2009 年を境に増加から減少に転じていたが 2013 年再び増加となっている。淋病は前年比で若干増加傾向である。

3) 香港

2013 年の HIV 報告数は 559 人（2012 年は 513 人）、AIDS 報告数は 84 人（2012 年は 86 人）である。前年と比べて HIV は大きく増加した（前年比 9% 増）。1984 年以降累計 HIV 感染報告数は 6,342 人となった。2007 年以降、勢いが鈍化ように見えた HIV 流行が再燃し始めた。

新規 HIV 感染報告のうち 79% が男性、70% が中国系である。感染経路の内訳をみると、主な感染経路は性感染で、異性間感染が 24.5%、同性間感染が 49.0%、両性間性行為が 3.8% となっている。同性間感染の報告数の増加が、2011 年以降の HIV 報告増加の主要因となっている。男性のみでは、異性間感染より同性間感染の報告数の方が多く、MSM における感染拡大が最重要課題となっている。

年齢別では、HIV は 20～30 代、AIDS は 60 代以上の報告の割合が増えていることが 2013 年の特徴である

STD の報告件数は全体的に横ばいか若干の増加傾向である。

4) 韓国

2013 年、韓国では 1,013 件の HIV および AIDS が報告された。これは、前年の 868 件より大幅な増加であり、2000 年代初頭の安定傾向から 2010 年以降新たな増加傾向に転じたことがうかがえる。

感染経路別の HIV/AIDS 報告数では、2012 年以降、同性間性行為と異性間性行為の区別なく性行為として分類されるようになったため、

MSM における報告数の変化を読み取ることが難しい状況である。しかし、性感染が最も多い感染経路である点は疑いない。

性感染症については、梅毒に加えて、クラミジア、淋病、軟性下疳、単純ヘルペスのデータを入手した。クラミジアに関して 2009 年以降減少傾向がある。他国との比較も含めて、今後さらなる分析が必要である。

以上より、近隣諸国・地域では、中国、台湾では、一時期静注薬物使用による感染が、大きな割合を占めたが、性感染（同性間、異性間）に移行し、東アジア全域で、HIV 流行は性感染、特に同性間感染を主体とするものとなり、今後の増加が懸念される。

B. 出入国の状況

<日本出入国者数>

2013 年は、外国人入国者数（再入国者を含む）は約 1,125 万人で、前年比約 208 万人の増加で過去最高となった。円安による割安感や、ASEAN 諸国に対する査証発給要件の緩和が影響したと考えられる。一方、日本人出国者数は、約 1,747 万人で、前年比約 101 万人の減少となった。円安傾向が影響したと考えられる。

2013 年の外国人入国者では、最も多いのが韓国 2,723,084 人、2 番目が台湾 2,245,543 人、続いて中国 1,604,621 人だった。前年比では中国は若干減少したものの台湾の増加は著しく、引き続き東アジア地域が入国者の 65%弱を占めた。米国からの入国者は 827,654 人で前年比 10.7%増、構成比では 7.4%を占めた

不法残留者数は、2014 年 1 月 1 日現在で 5 万 9,061 人であり、前年比 4.8%の減少である。最も多いのは韓国の 1 万 4,233 人で前年から 8.8%減少した。前年比では、上位 10 か国・地域のうち、中国、タイ、ベトナム、インドネシアでは増加、他の 6 か国では減少と国による違いがみられる。

<日本人海外滞在者数>

2013 年の日本人の海外旅行者の訪問先は、米国が約 373 万人で最も多く、中国約 288 万人、韓国約 275 万人、ハワイ約 152 万人、台湾約 142 万人、タイ約 154 万人の順であった。前年比はタイのみ 11.8%と大幅に増加、米国とハワイはほぼ前年並み、中国、韓国、台湾、香港は、大幅に減少した。

一方、3 ヶ月以上の長期滞在者の数は、2013

年 10 月 1 日現在、第 1 位は米国（約 25 万人）で、第 2 位が中国（約 13 万人）であるが、中国については、ここ数年来前年の増加傾向から初めて前年比減少に転じた。3 番目はタイ（約 5 万 8 千人）、4 番目は英国（約 5 万人）であった。

1-3) 我国の STI 流行及び妊娠中絶率等の動向に関する研究等（木原正博、本多由起子、木原雅子）

(1) 目的

わが国の HIV 流行の動向を左右すると考えられる国内の情報を収集・分析し、わが国の HIV 流行に対する社会的脆弱性の態様と動向を明らかにする。今年度対象とした情報は、① STD の状況、②10 代の妊娠中絶率の状況、③コンドームの国内出荷量の動向である。

(2) 方法

- 1) STD データは、厚生労働省の感染症発生動向調査から検索し、2013 年までの疾患別、年齢別、都道府県別の動向を分析した。
- 2) 中絶率のデータは、厚生労働省の 2013 年度衛生行政報告例から抽出した。
- 3) コンドーム出荷量については、薬事工業生産動態統計より 2013 年までのデータを得た。

(3) 結果・考察

1) STD の状況

主な定点把握性感染症（性器クラミジア、淋菌感染症、性器ヘルペス、尖圭コンジローマ）のうち、細菌性疾患は 2002 年のピーク、ウイルス性疾患は 2005、6 年のピーク以来、減少を続けていたが、男性では全疾患が 2009 年、女性では 2009-10 年以降下げ止まり、わずかな増減を繰り返し横這いの状態にある。しかし、全数把握疾患である梅毒は、これらの性感染症とは全く逆に、男女とも 2003 年にボトムに達した後、緩やかに増加してきたが、2013 年には、男性で前年比 43%増、女性で 28%増と大きく増加し、マスコミでも話題となった。

2) 人工妊娠中絶率の状況

人工妊娠中絶は 2001 年をピークに全年齢層で減少傾向が続いているが、10 歳代では減少が鈍化している。

3) コンドーム出荷量の動向

コンドームの国内出荷量は 1993 年以降、減少が続いてきたが、2009 以降急速の増加を続け、2013 年は 3.9 億個と、2009 年の 58%増を記録した。

以上、STD と中絶に関するデータの分析から、男女とも若い年齢層で、減少傾向が終息し、一部増加する傾向も現れているため、今後の動向に注意が必要であるとともに、予防教育の再強化が必要であると考えられる。また、同性間感染が示唆される男性梅毒は大幅に増加しており、同性間対策の強化は特に重要である。

以上の今年度の結果、及びこれまでのデータを総合して、以下のように考察する。

①梅毒（男性）は、他の性感染症との動向が異なり、最近急増傾向が見られる。欧米でも近年男性で梅毒流行が生じているが、これは、同性間での流行であることが証明されている（70・80%が MSM）。日本の男性における梅毒流行も同性間における流行である可能性が高い。このような観点から、梅毒については、欧米の動向にも留意しつつ、今後の経過観察が必要である。

②性器クラミジア、淋菌感染症、性器ヘルペス、尖圭コンジローマは、主に異性間感染を反映すると考えられるが、性器ヘルペス以外の STI は明らかに下げ止まり、性器ヘルペスは増加傾向にあるため、異性間性行為における行動リスクが再び高まってきた可能性がある。今後、男女共にこれらの疾患の動向に注視する必要がある。

③人工妊娠中絶の動向では、10 歳代でもっとも早く減少が始まり、その後 4 年遅れて、10・24 歳で減少が始まっているが、これは、無防備な性行動の減少が、若年層から始まったことを示唆している（コホート効果）。しかし、2010 年に 10 歳代で下げ止まり傾向が生じているため、上述の性感染症の動向とあわせて、今後の女性の変化には特に注意が必要である。

④コンドームの国内出荷個数は、近年大きく増加したが、性感染症、人工妊娠中絶の変化とはほぼ関連のない動きをしてきていることから、コンドーム出荷数から、性行動リスクを推測することは難しい。

以上、本年度までの研究によって、21 世紀に入って減少を続けていた性感染症が下げ止まり、性器ヘルペスは増加に転じたこと、妊娠

中絶率が 10 代でも下げ止まったことから、リスクの高い異性間性行動の新しい「波」が始まった可能性があることが示唆された。また、梅毒報告数が急増していることから、同性間感染リスクも依然高い可能性があるため、これらの動向を念頭においた対策の重点化が重要と考えられる。

(2)STD 患者の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究（分担研究者：荒川創一）

(1)目的

主な大都市圏の STD クリニックを受診した患者（男性、女性、セックスワーカー〔CSW〕）を対象に HIV 感染の浸透度をモニタリングし、HIV 検査ニーズや HIV 関連知識の普及状況を把握する。

(2)方法

全国 13 の STD クリニックを受診した患者（男女）及び CSW を対象として、希望者に無料 HIV 抗体検査を提供し、HIV 感染の浸透度を検討した。対象者は、STD 感染不安もしくは定期検診のために受診した者とし、同意を得て HIV 抗体検査および HIV 検査ニーズ及び HIV 関連知識に関するアンケート調査を行った。平成 26 年 11 月 20 日から平成 27 年 2 月末日の間に連続サンプリングし、各医療機関に割り当てた数に達した場合はそこでサンプリングを打ち切った

(3)結果

11 医療機関から症例が集まり、集まった症例数は、男性患者 180 例、女性患者 70 例、CSW30 例で合計 280 例であった。

HIV 抗体陽性者は、男性患者 6 名（3.33%）に認められた。アンケート分析（n=313）の結果、HIV 検査目的以外で受診した例は、男性患者 78.3%、女性患者 72.4%、CSW50.0%であったが、無料検査希望者は、90%近くと高率であった。HIV 受検経験者の割合は、男性患者 17.4%、女性患者 36.8%、CSW66.7%で、HIV 受検経験者中の複数回経験者は、それぞれ、25.0%、71.4%、85.0%であった。HIV 感染リスク認知が「全くない or 低いと思う」と回答した者は、男性患者 67.2%、女性患者 56.6%、CSW30.0%と、リスク認知が不十分な状況が示唆された。HIV 関連知識（7 項目）に関しては、正解率 65%以上が多く、知識レベ

ルは一般に低くはないが、3 グループとも、「性感染症に罹っていると HIV に感染しやすい」、「HIV 検査で感染が分かった場合、名前や住所が国に報告される」の正解率は低かった（それぞれ、44・62%、25・35%）。以上より次の点が示唆された。

(1)男性患者の HIV 抗体陽性率は 3%を超え、これまで同様保健所等での検査よりかなり高率であった。本調査では、男性の HIV 感染者は関東方面に集積していた。

(2)無料 HIV 検査へのニーズが全国的に非常に大きく、無料 HIV 検査提供の意義が改めて示された。

(3)STD クリニック受診者の中には、「性感染症に罹っていると HIV に感染しやすい」という予防上重要な知識の普及が不十分であり、今後の啓発の重要性が示唆された。

(3)薬物乱用・依存者の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究(分担研究者:和田清)

(1)目的

薬物乱用・依存者における HIV 感染を含めた STD 感染の実態を把握し、あわせて、注射器注射針の使用実態、性行動等 HIV 感染に関わるハイリスク行動を調査することによって、薬物乱用・依存者に対する HIV 対策の基礎資料に供することを目的とした。

(2)方法

研究は「1. 精神科医療施設に入院した薬物依存・精神病患者調査」(病院群調査)、「2. 薬物依存症回復支援施設における薬物乱用・依存者調査」(回復支援施設群調査)の2部門調査から成っている。各研究においては、対象者の同意の下で、調査用紙によるハイリスク行動の聞き取り調査と採血による血清学的検査、ないしは診療録からの転記調査を実施した。いずれの調査も、2014年1月1日～2014年12月31日に入院(一部通院)、入所(一部通所)した者を対象とした。病院群では5施設の初回対象患者277人(本調査経験者を含めると延べ352人を調べた。)を分析した。5施設中の4施設で、わが国の覚せい剤関連精神疾患患者全体の約11%は捕捉できると推定している。回復支援施設群は6施設の初回検査者85人(検査経験者を含めると196人)を分析した。

(3)結果・考察

乱用・依存薬物では、「捕まる行為から捕まらない行為」への流れが顕著であり、その結果、「脱法ドラッグ」関連患者(分類上は「他剤・多剤」関連患者(F19))が激増し、これまで常に最多だったF15(覚せい剤)関連患者数を大きく上回ったことが、2013年、2014年調査の最大の特徴である。また、HIV 抗体陽性者が2012年から増えているのは、ゲイ・コミュニティーないしは HIV 感染治療施設と薬物関連治療施設間での連携が増加した結果である。

【病院群調査】

病院群で、HIV 感染者3名を認めたが、全員 MSM であった。ICD-10 による薬物分類では、1名には覚せい剤依存症があるが、3名とも「脱法ドラッグ」関連障害であった。「脱法ドラッグ」は、その拡がりの爆発性と共に、性行為を通じての HIV 感染のハイリスクにもなり得るポテンシャルを秘めていると考えられる。病院群での覚せい剤関連患者では、HCV 抗体陽性率が34.4%(2013年は18.2%以下、括弧内は2013年の結果である。)と高かった。この HCV 抗体陽性率は経年的には確実に減少傾向を示していたが、2008年以降はやや増加傾向にある。注射行動等の感染ハイリスク行動にさほどの変化は見られないにも関わらず、HCV 抗体陽性率が増加傾向にある原因としては、覚せい剤乱用者の高齢化(平均年齢が1998年には32.9歳であったものが、2014年には43.5歳に上昇)が推測された。病院群での覚せい剤関連患者のハイリスク行動としては、78.5%(71.8%)の者に、これまでに注射による薬物使用の既往(以下、注射の既往)があり、この1年間でも約51%(51%)に注射の既往があった。また、59%(約51%)にシリンジ及び針の生涯共用経験があり、最近1年間に限っても、約17%(約17%)の者にシリンジ及び針の共用経験があった。経年的には注射の1年経験率、注射針の1年共用経験率は低下していたが、その背景には「あぶり」の普及があると推測される。

【回復支援施設群調査】

回復支援施設群調査では、2013年調査で初めて2名の HIV 抗体陽性者が認められたが、本年度の調査でも1名の陽性者を認めた。この3名はいずれも「脱法ドラッグ」依存患者の MSM

であった。病院群同様、「脱法ドラッグ」は、性行為を通じての HIV 感染のハイリスクにもなり得るポテンシャルを秘めていると考えられる。回復支援施設群の覚せい剤乱用・依存者での HCV 抗体陽性率は約 40.0% (2013 年では約 38%) であり、病院群の 34.4% より高かった。HCV 抗体陽性率は、長年減少傾向にあったが、2005 年以降は上昇傾向に転じている。その原因としては、病院群同様に覚せい剤乱用・依存者の高齢化 (平均年齢が 1998 年には 29.7 歳であったものが、2014 年には 41.5 歳に上昇) が推測された。覚せい剤関連患者の生涯注射経験率は 95% と高く、覚せい剤関連患者の 76~66% の者に、シリンジ/針の生涯共用経験があった。この値は病院群での値より高いが、最近 1 年間に限れば、覚せい剤関連患者での注射経験率は 39%、シリンジ/針の生涯共用経験率は 12~10% に低下しており、これらは病院群よりは低く、この群の者たちが、脱依存のために、回復支援グループの指導の元で共同生活を送りながら、回復を目指していることの表れであると考えられる。

【両群合わせての結果】

注射による HIV 感染の危険を知らなかった者の割合は両群で違いはなかった。しかし、C 型肝炎については、IDU 経験者の方が知っていた者が有意に多いという結果であった。知識があれば、危険行動はとらないと考えがちであるが、「逸脱の世界」では、往々にして、経験者の方が知識を持っているということもあり得る。また、HIV 感染、C 型肝炎感染が気になって「あぶり」を行った者は極めて少ないことが再確認された。この「あぶり」は、HIV 感染と直接の関連はないが、その気軽さ及びファッションナブルな感覚から覚せい剤乱用自体を拡大させる危険があり、薬物乱用防止の視点からは決して歓迎されるものではない。同時に、その気軽さ及びファッションナブルさから、性行動と結びつきやすい傾向が伺え、今後、薬物使用と性行動との関係に関する対応が必要である。病院群、非病院群に関係なく、HCV 抗体の陽性・陰性について、年齢、これまでの注射の回数、入れ墨の有無、風俗での性行動を独立変数として、判別分析を行ってみた。その結果、注射の回数、年齢、入れ墨、風俗での性接触の順に判別に寄与する程度が大きいことが確認

された。薬物乱用・依存者の HIV 感染は、注射行為のみならず、性行為による感染の可能性と重複していることが多い。「脱法ドラッグ」はそのことを如実に示している。今後も、その両面から HIV 感染の実態を把握してゆく必要がある。

(5)外国人薬物使用者等の HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究 (分担研究者: 中村亮介)

(1)目的

精神科病院に入院となった外国人患者について、①薬物乱用ことに注射器・注射針の使用実態、②性行動等 HIV 感染に関わるハイリスク行動を調査することによって HIV 対策の基礎資料に供する事を目的とする。

(2)方法

首都圏下の公立精神科病院に薬物使用等で入院となった外国人患者を対象として、対象者の同意の下に調査用紙によるハイリスク行動の聞き取り調査と採血による血清学的検査、ないしは診療録からの転記調査を実施した。

(3)結果・考察

2014 年の調査においては HIV 感染者はみられなかった。女性患者では昨年は風俗業に従事する物が減少の傾向を示したが本年は昨年と大きな変化は無かった。とくに男性患者において一般的には社会的に引き籠りを示す傾向が強い統合失調症患者の割合が増えている一方で、奔放な性行動をとる一群は増加を示しており、本年は「脱法ハーブ」の使用が増加を示した。

薬物乱用者は増加の傾向を示しており薬物乱用者間での HIV 感染拡大の一因として懸念されるところであり、今後とも外国人症例の調査が必要と考えられた。

5. まとめと考察

本研究により、わが国の HIV 流行の状況・特徴・国際的文脈や社会的脆弱性の状況を明らかにするのに必要な情報収集の枠組みが完成し、これまで分散して存在してきた関連情報のデータベースを構築し、それに基づくわが国の HIV 流行の現状や展望について、総合的な分析と理解を行うことが可能となった。

本年度までの研究から、以下の知見を得た。

- ① 東アジアにおいて 2000 年代に入ってから HIV 感染者報告数が急増しており、性感染、特に同性間感染が、東アジア諸国に共通にみられることが示された。
- ② 近隣諸国・地域との間の出入国数は、東日本大震災の影響もほぼ消え、ここ数年大きく増加しており、流行が流入・流出し易い状況が存在している。
- ③ 欧米諸国では、同性間感染による HIV 流行が、増加もしくは高止まりしている状況にある。また、HAART 療法の普及により感染者の社会的蓄積が進行している。STD は、データの得られた米、英、豪、加のほぼすべてで増加している。
- ④ わが国では、梅毒以外の STD は減少、梅毒は増加という一見相反する動向が同時に進行してきたが、系統的文献レビューを含めた本年度までの研究から、これらは、異なる集団における現象、つまり、梅毒は、MSM における流行動向、梅毒以外の STD は、異性愛者における流行動向を反映することが示唆された。
- ⑤ STD (梅毒以外) や 20 歳代前までの人工妊娠中絶率は、2009 年まで減少を続けてきたが、性器クラミジア、淋菌感染症、性器ヘルペスは、2010 年以降ほぼ下げ止まって一部上昇に転じ、人工妊娠中絶率も、10 歳代で下げ止まり、リスクの高い行動に新しい動向が生じつつある可能性が示唆された。
- ⑥ STD クリニックを受診する男性患者における HIV 感染率は、2006 年以来、1-3% 程度で推移しており、保健所に比べると高い感染率を示している。また、STD クリニック受診者においては、全国的に、無料 HIV 検査に対する非常に高いニーズが存在する。
- ⑦ 薬物使用者の間では、HIV 感染者が出現するようになり、本年度も、病院群で 3 人、自助施設群では 1 人の HIV 感染者が確認された。注射の共有率は長年減少傾向にあったが、最近増加傾向にあるため、今後のアウトブレイク発生の可能性について、慎重な注視が必要である。また、これらの感染者の多くは MSM であることから、同性間で薬物使用に対する対策の重要性が示

唆された。

このように、本研究によって、わが国の HIV 流行とそのリスクの状況の多角的分析が進み、国際比較によって、その国際的文脈や特徴の分析も進んだ。これらの分析結果は、わが国は、流行度の高い国々・地域に囲まれていること、欧米でも対策に苦慮していることから、わが国の状況に適した効果的な対策の確立・普及が急務であることを示している。

しかし、実際には、エイズ予防指針が存在するにもかかわらず、地域では、啓発や施策形成に必要なデータすら容易に入手できる状況になく、対策費も乏しい中、住民の啓発レベルは低レベルに留まっている。

本研究では、こうした状況に鑑み、情報提供のための Web サイトを開設し、情報発信を行い、今年度は定例の内容の改訂を行い、最新化した。同サイトは、Wikipedia にリンクされて、相当のアクセス数があり、また、NGO や HIV/STD 専門家、またマスメディアの情報源として利用されている。

6. 自己評価

1) 達成度について

各種行政統計の収集、薬物乱用・依存者および STD 患者の HIV/STD 感染率・行動調査をほぼ予定通りに達成した。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

本研究は、内外のエイズ・STD に関連する情報を網羅的に収集し、総合的に解析することを通して、わが国におけるエイズ予防施策の推進に資する情報基盤を構築するという点で、また、Web による最新情報の提供は、停滞した普及啓発の活性化につながる可能性があるという点で、予防指針に基づくわが国の今後のエイズ施策の展開を支えるという重要な社会的意義がある。

3) 今後の展望について

・本研究で実施した HIV 関連データベースの構築は、普及啓発に関わる関係者のニーズが高く、データベースの継続構築と Web サイトの維持は、研究として継続されるべきである。

・薬物使用者と STD 患者の研究は、本来国家が実施すべきセンチネルサーベイランスに相当するものであり、継続が必要である。

7. 結論

研究はほぼ予定通りに進行し、わが国の施策の形成や推進に必要な情報基盤、理論基盤の整備や施策分析を推進することができた。

平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
高リスク層の HIV 感染監視と予防啓発及び内外の HIV 関連疫学動向の
モニタリングに関する研究

海外及び国内の HIV/性感染症の流行とリスク情報の収集分析に関する研究(1)
先進諸国の HIV/AIDS 及び性感染症の動向に関する研究

西村由実子¹、木原雅子²、木原正博²

¹関西看護医療大学看護学部

²京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野

研究要旨

目的	先進諸国の HIV/AIDS 及び性感染症の動向に関する既存の情報を収集・分析し、わが国のエイズ・性感染症対策の効果的・効率的な発展に資する。
方法	先進国の HIV/AIDS 疫学情報データベースおよび性感染症疫学情報データベースに 2013 年分データを追加し流行の動向を把握する。HIV/AIDS については、米国、カナダ、オーストラリア、英国、フランス、ドイツの 6 カ国、性感染症については、米国、カナダ、オーストラリア、英国の 4 カ国を対象とする。
結果	全般的に、前年の結果を踏襲する傾向といくつかの変化が観察された。すなわち、①エイズ報告数は多剤併用療法普及に伴い各国で着実に減少している、②HIV 感染報告数は、減少および横ばい傾向と微増傾向があり、MSM における再燃は各国で顕著である、③性感染症報告は全体的に増加傾向だが、2013 年米国と豪州で性器クラミジアの前年比減が記録され、淋菌感染症と梅毒は各国において顕著な増加が認められた。
結論	日本と交流の盛んな先進国における HIV 感染症および性感染症流行の動向についての情報の主に 2013 年分の最新データが追加され、データベースが一層充実した。HIV 感染症と性感染症の経年変化を継続してモニタリングすると同時に、よりよいサーベイランス体制についても検討していく必要がある。

A. 目的

わが国と交流の多い主な先進国における HIV 感染症及び性感染症流行の動向に関する情報を収集・分析し、モニタリングすることを目的とする。

B. 対象・方法

HIV 感染症については、米国、カナダ、オーストラリア、英国、フランス、ドイツを対象とし、性感染症としては米国、カナダ、オーストラリア、英国を対象として、各国の公的機関から出されている HIV/AIDS 及び性感染症に関する疫学情報を、主にインターネットによって収集した。以下が参照した機関一覧である。

<HIV/AIDS 疫学情報参照機関>

1. 米国
 - 疾病予防センター (Centers for Disease Control and Prevention: CDC)
2. カナダ
 - カナダ公衆衛生局 (Public Health Agency of Canada: PHAC)
3. オーストラリア
 - Kirby 研究所 (The Kirby Institute for

infection and immunity in society; National Centre in HIV Epidemiology and Clinical Research が 2011 年 4 月より改名)

4. 英国
 - 英国政府公衆衛生局 (GOV.UK Public Health England: Health Protection Agency が 2013 年 4 月より Public Health England の下部組織となる)
5. フランス
 - 国立公衆衛生監視研究所 (Institut de Veille Sanitaire: InVS)
6. ドイツ
 - ロベルト・コッホ研究所 (Robert Koch Institut: RKI) および連邦健康モニタリング・システム (Federal Health Monitoring)
7. ヨーロッパ全体
 - WHO ヨーロッパ地域事務所 Centralized information system for infectious diseases (CISID)
 - HIV/AIDS Surveillance in Europe (EuroHIV: 2007 年までフランス国立公衆衛生監視研究所内)

- European Centre for Disease Prevention and Control (ECDC : 2008年より欧州共同体の HIV/AIDS サーベイランス担当)

Transmitted Infections : ESSTI)

- WHO ヨーロッパ地域事務所 Centralized information system for infectious diseases (CISID)

<性感染症疫学情報参照機関>

1. 米国
 - 疾病予防センター (Centers for Disease Control and Prevention: CDC)
2. カナダ
 - カナダ公衆衛生局 (Public Health Agency of Canada : PHAC)
3. オーストラリア
 - 保健・高齢者担当省 (Australian Government, Department of Health and Ageing)
4. 英国
 - 英国政府公衆衛生局 (GOV.UK Public Health England : Health Protection Agency が 2013 年 4 月より Public Health England の下部組織となる)
5. ヨーロッパ全体
 - 欧州共同体性感染症サーベイランス (European Surveillance of Sexually

C. 結果

<HIV/AIDS>

1. 全般的な動向

モニタリング対象としている先進国のうち、2013 年の新規エイズ患者報告数が確認できたのは仏、英、加である。いずれも前年比で減少しており、2012 年までのデータが追加された米、独の状況を加えても全体として AIDS 報告数は着実に減少傾向である (図 1)。各国において HIV 感染者の治療へのアクセスができていくといえる。2013 年 HIV 感染者新規報告数は、英国で減少、加・豪は横ばいである。2012 年データまでの米・独・仏については、独・仏において増加の兆しがみられる (図 2)。感染経路別の変化では、全体として同性間の性的接触による感染が多くをしめ、かつ増加または横ばい傾向であり、各国における最重要課題となっている (図 3)。

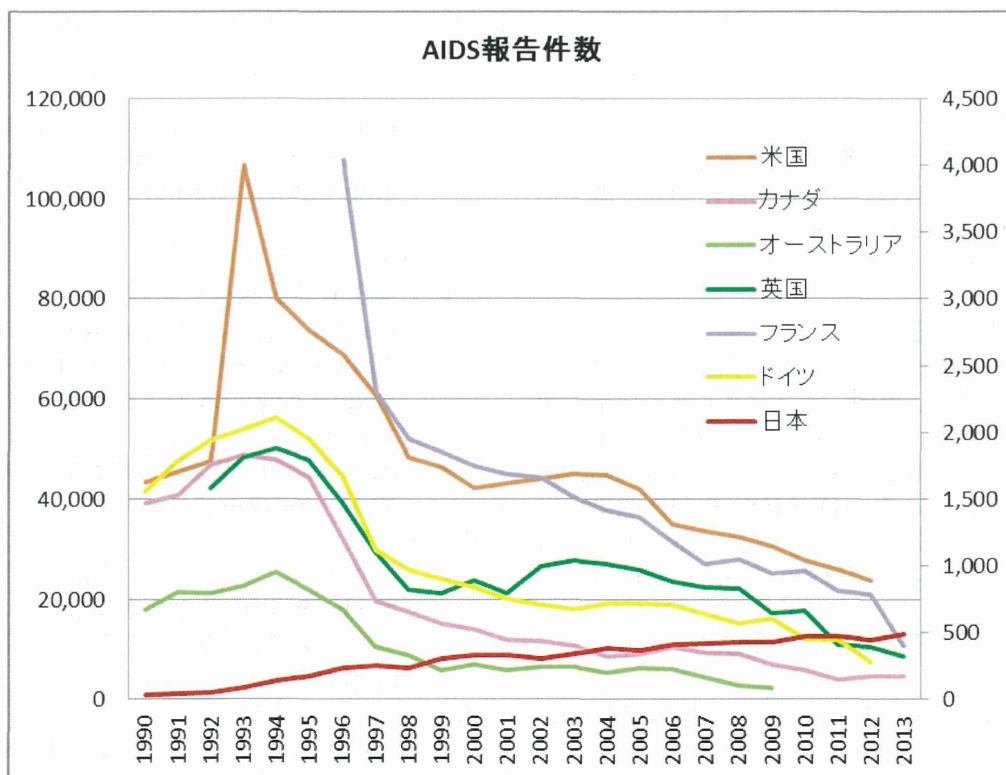


図 1. エイズ患者新規報告数国別年次推移

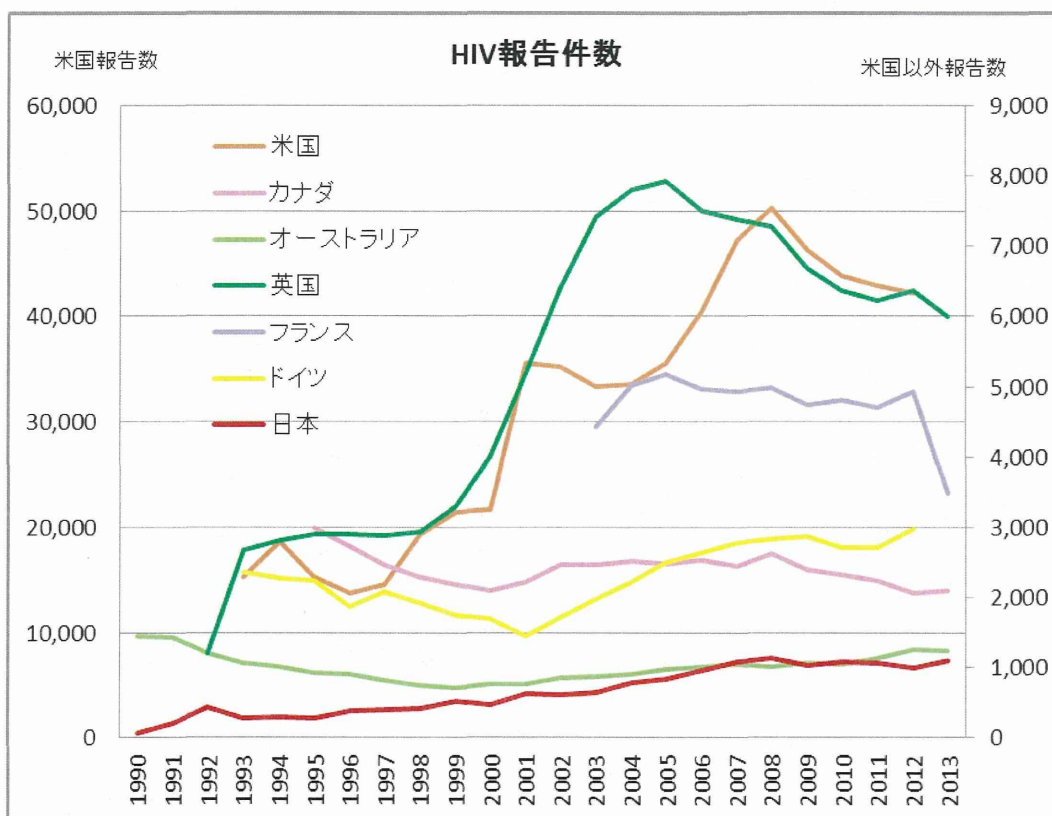


図 2. HIV 感染者新規報告数国別年次推移

2. 米国

平成 26(2014)年 11 月に 2012 年末までの HIV Surveillance Report が CDC より発表された。この最新報告書において 2008 年に導入された全州における匿名氏名ベース HIV 報告システムによるデータがようやく 5 年分出揃った。

米国の 2012 年の HIV 流行の状況は次のとおりである。2008～2012 年の年間推計 HIV 発生率はほぼ横ばいであった。2012 年の 10 万人あたりの推計 HIV 発生率は 15.3 で前年より減少した。同期間に HIV 発生率が増加した年齢層は 13～14 歳と 20 代で、35 歳以上は減少した。2012 年に発生率が最も高かったのは 20～24 歳 (36.3/10 万対) および 25～29 歳 (35.5/10 万対) だった。性別では、5 年間の発生率の変化は、女性では減少し男性では横ばいだった。2012 年の HIV 感染の約 80% は男性で 29.9 (10 万対) だったのに対し女性は 7.2 (10 万対) だった。感染経路別の 5 年間の変化は、男性において MSM の感染が増加したことが挙げられる。2012 年では、成人および若者男女の感染の 67% が男性同士の性感染であり、26% が異性間の性感染と、全体の 93% を

性感染が占めた。

2008～2012 年の 5 年間の Stage3(AIDS) の年間推計発生率は減少し、2012 年は 8.9 (10 万対) だった。年齢層別でみると、発生率が 5 年間に増加したのは 20～24 歳でこれ以外の層では減少か横ばいだった。2012 年では、45～49 歳の 19.0 (10 万対) が最も高く、次いで 40～44 歳の 18.5 (10 万対) だった。性別について、5 年間で男女共に Stage3 (AIDS) の推計発生率は減少した。2012 年の Stage3(AIDS) 診断の 75% を男性が占めており、男性における発生率は 16.5 (対 10 万人)、女性の発生率は 6.0 (対 10 万人) だった。感染経路別の 5 年間の変化は、男性同性間性行為のみ横ばいで、それ以外の静注薬物使用や異性間性行為は男女とも発生率が減少した。

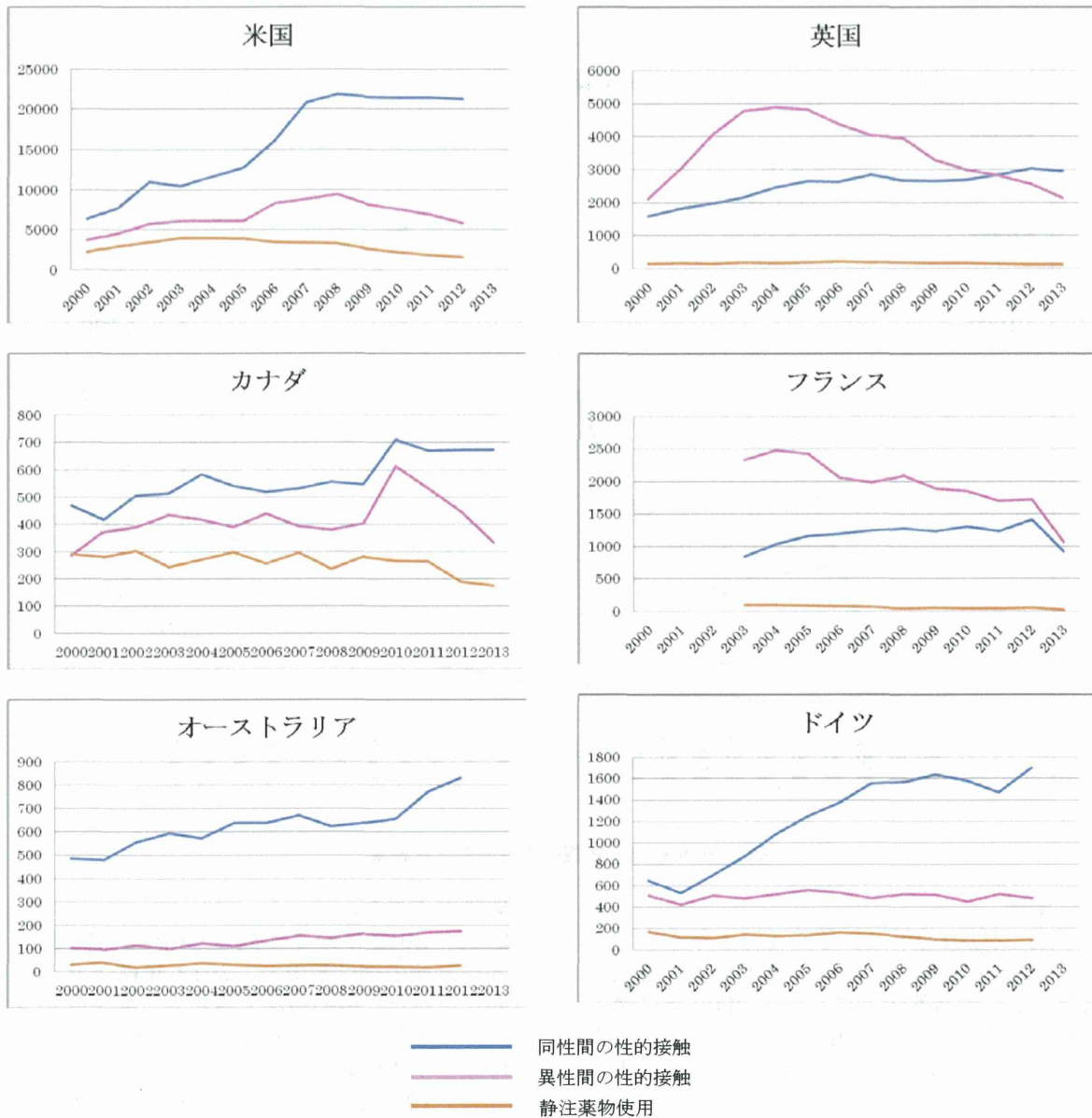


図 3. HIV 感染経路別 年次推移

3. カナダ

カナダでは、HIV and AIDS in Canada という包括的な報告書が毎年出されていたが、2009年以降しばらく出ていなかった。しかし、2014年11月に2013年12月末までのデータをまとめた同報告書が発行された。

この報告書によると、2013年のHIV報告数は2,090人で、前年の2,099人から0.4%減少した。これはHIV報告が始まった1985年以来、最も低い数値であり、2008年以降は緩やかな減少傾向である(図2)。2013年のHIV報告のうち、最も多いのはオンタリオ州(827件,39.6%)からの報告で、それにケベック州(453件,21.7%)、ブリティッシュ・コロンビア

州(272件,13.0%)が続く。性別では、女性の割合は21.9%であり、この割合は過去約10年、比較的安定している。年齢区分と性別に関して、女性は10代と20代の割合が多いのに対し、男性では30代以上の割合が多くなっている。感染経路については、2013年の15歳以上のHIV報告全体の49.3%をMSMが占めている。それに次ぐのが異性間性接触の29.6%、三番目はIDUであり12.8%だった。

AIDSについては、2013年中に177人報告され、1979年からの累積報告数は23,111人となった。2013年の成人AIDS報告数のうち76.8%が男性である。年齢区分では、HIV同様、女性は10~20代の割合が多く、男性は30